平成 22 年 5 月 11 日

各　　位

会社名	タカラバイオ株式会社 （コード番号 4974　東証マザーズ）
本社所在地	滋賀県大津市瀬田三丁目４番１号
代表者	代表取締役社長　　仲 尾　功 一
問合せ先	代表取締役副社長　木 村　　睦
ＴＥＬ	（０７７）５４３-７２１２
ＵＲＬ	http://www.takara-bio.co.jp/
親会社等の名称	宝ホールディングス株式会社
代表者	代表取締役社長　　大 宮　　久 （コード番号 2531 東証、大証第 1 部）

タカラバイオグループ中期経営計画を策定

タカラバイオ株式会社（社長：仲尾　功一）では、2010 年 4 月から 2013 年 3 月末までのタカラバイオグループの中期経営計画を策定しました。

当社は、「遺伝子治療などの革新的なバイオ技術の開発を通じて、人々の健康に貢献する」ことを企業理念として、当社の基幹技術であるバイオテクノロジーを活用し、安定収益基盤である「遺伝子工学研究分野」、第 2 の収益事業化を目指す「医食品バイオ分野」、成長基盤である「遺伝子医療分野」の 3 つの事業分野において、事業を推進しています。

本中期経営計画では、2012 年度のタカラバイオグループ連結売上高 215 億円の達成及び研究開発費の増加を吸収して経常利益 12 億円への利益拡大を目指します。初年度である 2010 年度は、昨年 5 月発表の中期経営計画（2011 年度に経常利益 10 億円）を 1 年前倒しし、経常利益 10 億円（過去最高益）を目指します。

「遺伝子工学研究分野」では、市場の伸びが期待できるリアルタイム PCR や細胞生物学分野への積極的な新製品・サービスを提供することで事業の拡大を図ります。「医食品バイオ分野」では、健康志向食品やキノコの売上増及び効果・効率的な費用投下により、2011 年度の営業黒字化を目指します。「遺伝子医療分野」においては、遺伝子治療・細胞医療の研究開発を積極的に推進するとともに、売上の拡大も目指します。

1. 業績目標

連結業績目標　（単位：百万円）

	2010 年度	2011 年度	2012 年度
売　上　高	19,350	20,200	21,550
営 業 利 益	800	950	1,100
経 常 利 益	1,000	1,150	1,200
当期純利益	600	720	750
研究開発費	3,060	3,250	3,600

セグメント別売上高　（単位：百万円）

	2010 年度	2011 年度	2012 年度
研究用試薬	11,411	12,098	13,141
理化学機器	2,333	2,333	2,333
受　　託	1,871	1,971	2,071
そ　の　他	979	947	947
遺伝子工学研究　計	16,595	17,350	18,493
遺伝子医療	384	471	591
健康食品その他	609	565	641
キノコ	1,760	1,813	1,824
医食品バイオ　計	2,370	2,378	2,465
売上高　合計	19,350	20,200	21,550

セグメント別営業利益　（単位：百万円）

	2010 年度	2011 年度	2012 年度
遺伝子工学研究	4,140	4,265	4,591
遺伝子医療	▲1,583	▲1,781	▲1,973
医食品バイオ	▲256	46	123
共通	▲1,500	▲1,579	▲1,641
営業利益　合計	800	950	1,100

セグメント別研究開発費　（単位：百万円）

	2010 年度	2011 年度	2012 年度
遺伝子工学研究	914	1,014	1,114
遺伝子医療	1,620	1,843	2,088
医食品バイオ	338	198	197
共通	187	195	200
研究開発費　合計	3,060	3,250	3,600

2. 事業分野別施策

「遺伝子工学研究」、「遺伝子医療」、「医食品バイオ」の3つの事業分野に照準を合わせ、継続的に黒字を計上する一方で、経営資源投下について選択と集中を図り事業構造の改革を進め、成長基盤の構築を目指すため、以下に掲げる事業を展開していきます。

①遺伝子工学研究分野

大学や企業などの世界のバイオ研究者向けに研究用試薬・理化学機器の販売や研究受託サービスを行う当分野は、現在、当社の収益基盤であるコアビジネスとして位置づけていますが、さらなる強化を図るため、次のような事業展開を積極的に進めます。

- リアルタイム PCR 分野、エピジェネティクス分野、細胞生物学分野における新製品開発・売上拡大
- iPS 細胞、次世代シークエンシング関連技術開発及び受託サービスの売上拡大
- マーケティング力強化による Asia Pacific 等の海外での売上拡大
- グループ会社製品の中国への製造移管による価格競争力の強化

②遺伝子医療分野

遺伝子治療・細胞医療の臨床開発を推し進め、国内初の体外遺伝子治療の商業化を目指し、次のような事業を積極的に展開します。

【遺伝子治療】

- 白血病を対象とした HSV-TK 遺伝子治療の臨床開発の推進（提携先：国立がん研究センター）
- がんを対象とした TCR 遺伝子治療の臨床開発の推進（提携先：三重大学等）
- RNA 分解酵素 MazF を利用したエイズ遺伝子治療法の米国での臨床開発（提携先：ペンシルベニア大学等）
- 新規ベクターシステムの開発等の遺伝子治療の次世代基盤技術の開発

【細胞医療】

- レトロネクチン®誘導 T リンパ球療法の臨床開発の推進（提携先：京都府立医科大学等）
- レトロネクチン®誘導 T リンパ球療法等の総合支援サービスの売上拡大
- がん免疫細胞療法用の細胞培養培地・バッグ等の売上拡大

③医食品バイオ分野

機能性食品素材の開発を中心とした健康志向食品やキノコに関する次のような事業を積極的に展開します。

- ガゴメ昆布「フコイダン」、寒天「アガロオリゴ糖」、明日葉「カルコン」、ヤムイモ「ヤムスゲニン®」、ボタンボウフウ「イソサミジン」、きのこ「テルペン」などの機能性成分を応用した健康志向食品素材のエビデンス強化等による売上拡大
- ハタケシメジ、ホンシメジの新技術導入によるコストダウンと自社販売による売上拡大
- より安全・安心な製品を提供するための、品質管理・品質保証体制の強化
- マツタケゲノムなどを活用した高付加価値キノコの新規栽培法の確立

当資料取り扱い上の注意点

当資料中の当社の現在の計画、見通し、戦略、確信などのうち、歴史的事実でないものは、将来の業績に関する見通しであり、これらは現時点において入手可能な情報から得られた当社経営陣の判断に基づくものですが、重大なリスクや不確実性を含んでいる情報から得られた多くの仮定および考えに基づきなされたものであります。実際の業績は、さまざまな要素によりこれら予測とは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素には、経済情勢、特に消費動向、為替レートの変動、法律・行政制度の変化、競合会社の価格・製品戦略による圧力、当社の既存製品および新製品の販売力の低下、生産中断、当社の知的所有権に対する侵害、急速な技術革新、重大な訴訟における不利な判決等がありますが、業績に影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。

＜参考資料＞

【語句説明】

リアルタイムPCR法

従来のPCR法は、サーマルサイクラーという機器で目的DNAを増幅した後、増幅産物を電気泳動で解析するという手順で行われています。リアルタイムPCR法では、サーマルサイクラーと分光蛍光光度計を一体化した機器を用いて、PCRでのDNA増幅産物の生成過程をリアルタイム（実時間）で検出し、解析できます。DNA増幅産物の生成の過程を連続して観察できるため、より正確な定量が可能となります。また電気泳動を行う必要がないため、解析時間の大幅な短縮が可能となります。

エピジェネティクス

塩基配列に依存しない遺伝子発現の多様性を生み出す仕組みを意味します。染色体構造、あるいは、ゲノムへの後天的な修飾により遺伝子発現が制御されることに起因する遺伝学あるいは分子生物学の研究分野です。修飾としては、主に DNA 塩基のメチル化とヒストンの化学修飾があります。それぞれの修飾の変化は、発生や分化の過程において経時的に生じ、細胞の形質発現への寄与は大きく、分子生物学上の一大領域を形成しつつある学問分野です。iPS 細胞の研究においても、DNA メチル化の解析が行われています。

iPS 細胞

体細胞に、再プログラム化に必要な数種類の遺伝子を導入し誘導される分化多能性を獲得した細胞のことです。2006 年に京都大学山中伸弥教授らのグループにより、この現象が発見され人工多能性幹細胞（induced Pluripotent Stem Cells：iPS 細胞）と名付けられました。iPS 細胞は、ES（Embryonic Stem）細胞とほぼ同等の分化多能性を示すことから、薬剤開発、種々の疾患の病態解明や再生医療への応用が期待されています。

RNA 分解酵素

mRNAの特定の配列を特異的に認識して切断する酵素で、当社はこれらをRNA分解酵素と呼んでいます。MazFは、大腸菌由来の酵素で、mRNAのACAの塩基配列を認識し、切断します。

レトロネクチン®

レトロネクチン®は、当社が開発したヒトフィブロネクチンと呼ばれる分子を改良した組換えタンパク質です。レトロネクチン®を用いたレトロウイルスベクターによる遺伝子導入法は、レトロネクチン法として知られており、レトロウイルスベクターによる遺伝子治療の臨床研究のスタンダードとなっています。

さらに、当社はレトロネクチン®の新たな機能として、リンパ球の培養を増強する効果を発見し、レトロネクチン®の臨床応用を進めています。

ヤムスゲニン®

ジオスゲニンは、ヤマノイモ科やユリ科の植物に含まれるステロイドで、様々な生理活性を有するといわれています。当社では、「ヤムイモ由来のジオスゲニン配糖体」を「ヤムスゲニン®」と命名し、様々な機能性の研究を進めております。

ボタンボウフウ

ボタンボウフウ（牡丹防風）は日本では本州以西から沖縄までの海岸沿いに生育するセリ科の植物で、学名を *Peucedanum japonicum* といいます。沖縄では別名、長命草やサクナと呼ばれています。屋久島産ボタンボウフウには、有用成分であるイソサミジンが含まれており、当社では様々な機能性の研究を進めております。

以上